

## V43a 広島大学 1.5m かなた望遠鏡のファーストライトと周辺の進捗

川端弘治、大杉節、山下卓也、植村誠、永江修、新井彰、千代延真吾、深沢泰司、水野恒史、片桐秀明、高橋弘充(広島大)、沖田喜一、吉田道利、家正則、(国立天文台)、北川雅裕、上原麻里子、木野勝、佐藤修二(名大)、野上大作、嶺重慎(京大)、関敬之(西村製作所)

広島大学では、国立天文台より譲り受けた 1.5m 光学赤外線望遠鏡「かなた」を用いて、ガンマ線衛星 GLAST や X 線衛星 Suzaku などと密接に連携した高エネルギー天体の観測研究を推進している。本講演では、かなた望遠鏡のファーストライトを含む望遠鏡計画の進捗をまとめて報告する。

望遠鏡を収める天文台施設は 2006 年 3 月に竣工し、その後架台や駆動制御機構などが一新された望遠鏡の移設が行われて、5 月 26 日には東広島天文台完成記念式典が挙行された。その後、本格観測試験開始へ向けて、光学系、駆動制御系の調整が進められている(新井ほか、本年会講演)。既に同口径の望遠鏡としては稀な 5 度/秒の方位軸の駆動速度が安定的に得られており、突発天体即時フォローアップへのユニークな成果に期待がかかる。

観測装置については、2006 年 8 月以降に、カセグレン焦点に可視近赤外同時撮像分光装置 TRISPEC が、第二ナスミス焦点に高速 CCD カメラがそれぞれ装着され、試験観測が行われる予定である。かなた望遠鏡の第一ナスミス焦点へ常設される広視野偏光撮像器 HOWPol は、ウェッジ付き色補償型ウォラストンプリズムを含む光学素子が完成し、秋以降となる筐体・駆動制御系の完成を待って組み上げられる予定である。完全空乏型 CCD を用いる HOWPol の検出器システムは、デュワーの真空冷却試験、読み出し回路の立ち上げが進められている(永江ほか、本年会講演)。また、年度内には次世代望遠鏡での実用化が期待されているセラミック副鏡の試験導入も予定されている。